

拓殖大学地方政治行政研究所
拓殖大学政治行政研究 第7巻 抜刷
2016年2月22日 発行

〈書 評〉

久米郁男

『原因を推論する — 政治分析方法論のすすめ』

(有斐閣, 2013年)

浅野正彦

久米郁男

『原因を推論する ― 政治分析方法論のすすめ』

(有斐閣, 2013年)

浅野正彦

本書の「序章」にあるように、本書は政治学とりわけ実証的・経験的な政治学における「分析方法」を教える書であり、その際に従うべき「作法」を論じている。政治現象に限らず、広く社会科学全般にわたって見られる社会現象を「結果」としてとらえ、その結果を引き起こす真の「原因」を特定するという姿勢で貫かれている。本書の中心テーマは、原因が結果に影響するプロセス、つまり因果関係メカニズムの解明方法である。

私たちを取り巻く社会には多くの「べき」論が溢れている。曰く「消費税は上げるべき」「安保法案は廃案にすべき」「選挙権年齢は18歳に引き下げるべき」等々、数え上げればきりが無い。著者はこのような議論を二種類に分類する。一つは、何が正しいかをめぐる「規範的な議論」、そしてもう一つは、実際にはどうなっていて、なぜそうなっているのかに関する「経験的・実証的な議論」である。本書では後者の議論の仕方について焦点を絞り、考察を深めている。

本書の魅力は、次の三点に要約できる。第一の魅力は、構成のわかりやすさと取り上げているテーマの面白さにある。著者によれば、本書は「まず、より身近で一般的な社会現象を題材として説明の方法に関する論点を考えた上で、その論点を政治学の具体的な研究テーマに当てはめてさらに考察する」構成になっている。肥満と出世の関係、高身長は得か、非行と朝食の関係、女性の社会進出と出生率の関係、若者にとって選挙を棄権することは得か、超能力は存在するか、大学生の学力は低下しているのか等々、身近で誰もが興味を抱く事例を挙げながら、徐々に実証分析が抱える根本問題へと読者を誘い、分析の作法をしっかりと伝えながら読者に考えさせるという構成は実に見事である。実証分析を実際に行う上で特に重要と思われる、分析の単位、選択のバイアス、そして観察のユニバースなど分析の作法についてしっかり理解し留意しなければ、誤った結論を導きかねない。社会科学の方法論に関する著書は巷にあふれているが、これほど身近な題材で読者の関心をつかみ、さらに政治学の専門的な研究テーマの核心へとスムーズに引き入れている本は、寡聞にして知らない。

本書の二つ目の魅力は、政治学の研究テーマ（比較政治経済学）に関する幅広い見識に裏付けられた具体的な事例が挙げられ、それぞれにわかりやすい解説が付されていることである。本書では、社会現象全般に関する事例が取り上げているが、身近な事例を楽しみながら読み進んでいると、選挙活動の効果、選挙制度改革、政官関係、資源の呪い、比較革命、比較福祉国家などといった比較政治経済学で取り扱う「固い」話題へと引き込まれていることに気づく。通常「政治経済学」というと「何だか難しそ

う」と敬遠されるものだが、身近な話題について読み進むうちに、読者はいつの間にか「政治経済学って面白いかも」という次元に引きずり込まれてしまう。本書にはそのような魅力がある。

第三の魅力は、本書では定量的研究と質的研究の関係をわかりやすく説明している点である。データ分析を扱う定量的研究と事例研究などの質的研究は、通常、全く異なるものと思われがちであるが、著者は両研究には一つの共通の分析方法・ロジックが存在し、因果関係の存在を示すために必要な三つの条件は、いずれにおいても確認される必要があると主張する。これらの条件とは、①独立変数と従属変数との共変関係、②独立変数の時間的先行、③他の変数を統制しても共変関係が観察される、の三つである。著者は社会科学における比較歴史分析における古典的研究を取り上げ、比較政治経済体制や比較福祉国家研究に関する事例を挙げつつ、質的研究の世界における具体的な因果推論の試みを紹介している。

評者は大学で「計量政治学」「政治学方法論」「政治行動論」という実証政治学関連の授業とゼミを担当しているが、2014年度以降『原因を推論する』を必読文献に指定し、履修者に書評の提出を課している。非常勤先での学生数を含めると、書評の課題を提出する学生数は年間で約400名に及ぶが、その多くが「この本を大学一年生の時に読んでおきたかった」という感想を寄せている。この一言が、本書の魅力を表している。

評者が『原因を推論する』を初めて目にしたのは2013年の秋であった。目次を眺めながら「これは政治学における『創造の方法学』だ」と思った。『原因を推論する』の書評を書く上で『創造の方法学』（講談社現代新書、1979年）について言及しなければならない。この本は、社会学者の高根正昭氏が1979年に世に出した、社会科学における方法論の重要性を日本に紹介した先駆的な業績であり「今や研究方法論教科書の古典」（久米氏）ともいわれる名著である。

評者は1987年に偶然、この本に出会った。当時、大学院で政治学の修士論文作成に取り組んでいた評者にとって、高根氏の『創造の方法学』はまさに「救いの神」であった。というのも、当時の日本の大学院（少なくとも評者が所属していた大学院政治学研究科）では、様々な政治学の理論や専門知識については詳しく教えてくれたが、具体的な研究方法や学術論文の書き方を教える授業は存在しなかったからである。当時の日本の社会科学系大学院では、一般的に、研究手法は教授から丁寧に「教えてもらう」ものではなく、職人芸よろしく、学生たちが教授達から「盗みとる」ものであった。

修士論文の書き方がどうしてもよくわからなかった評者は、所属する大学でこれまでに提出された修士論文を所蔵している図書館に入り浸り、先輩方の修士論文を（文字通り）読み漁った。修士論文で求められているものは何か、大学院生としてどのような研究を行い、何をどのように書けばいいのかを知りたかったからである。しかし、その努力は見事に裏切られた。過去の修士論文を読めば読むほど、混乱はさらに深まったからである。先行研究を上手にまとめた後に自分の感想を書き加えたもの、エッセイのようなもの、結局何を言いたいのか最後まで不明なものまで、実に多種多様な「修士論文」が存在していることを知った。一週間ほど朝から晩まで図書館に通い詰め、過去の修士論文を読み漁り、読み耽ったが、求めていた解答が見つからず、すっかり途方に暮れてしまった。

そんな時に出会ったのが、高根氏の『創造の方法学』であった。そこには、社会学者である高根氏がアメリカの大学院（スタンフォード大学とUCバークレー）に留学して習得した社会科学の方法論に関

して、今まで聞いたこともない、斬新で魅力的かつ具体的な研究方法が紹介されていた。「記述」と「説明」の違い、因果法則を満足させる三つの条件、仮説検証について等々、社会学におけるミヘルスの寡頭制やデュルケムの『自殺』などの実例を使いながら丁寧に解説されていたのである。高根氏のこの著書を頼りに、評者は、見様見真似で何とか政治学の修士論文を仕上げることができた。

少々横路に逸れてしまったが、評者の大学院生時代の経験を踏まえると、久米氏の『原因を推論する』は、政治経済学だけでなく、社会科学全般に関する論文（ゼミ論文・修士論文・博士論文・学術論文）を仕上げようとしている学生や、さらに精度の高い実証研究を目指す若い政治学者にとって不可欠な指南書であり「救いの神」であるに違いない。本書はまた、政治経済学を専攻する研究者や学生ばかりでなく、政治家や官僚など公務員にとっても有益であろう。「政治学者は現実の政治の実態を知らない」とよく揶揄されるが、同様に「政治家や官僚など政治の実務に携わる公務員が現実の政治のメカニズムを知らない」可能性も否定できないからである。

メディア等で社会問題を扱うドキュメンタリーなどの製作担当者にとっても、本書は有益と思われる。私たちは、社会の出来事の多くをテレビやネットなどのメディアを通じて「知る」。従って、この時点でバイアスが入り込んで事実に向加えられると、その後の議論は全く意味をなさない。社会で日常的に起きている現象（「結果」）を正確に私たちに伝えるというメディアの役割の精度を高める上で、本書から学ぶことは多いはずである。また、メディア等で放映されている、いわゆる「政治談義」に物足りなさを感じている人々にも役に立つはずである。「……はけしからん」「……は良い」という規範的な議論（べき論）を超えて、現在進行中の様々な政治現象を結果としてとらえ、その結果を引き起こしている「真の原因は何か」という視点を持つことで問題の核心が明確になり、単なる「水掛け論」ではない、手応えのある実り多き議論が可能になるはずである。

本書に関して唯一残念なのは、評者が大学一年生の時に出版されなかった事である。もし大学一年生の頃にこの本に出会っていたら、大学で履修する様々な授業にもっと知的関心をもって出席していたことであろうし、教授の講義から多くを得ていたに違いない。

以上の理由から、とりわけ大学で社会科学を専攻する全ての新生に、必読書として本書を強く推薦したい。